

# ミャンマー民主化運動伴走記 2023年版 ①

ミャンマー国軍は、2021年2月1日、アウンサンスーチー国家顧問兼外相らを拘束、政権を奪取した。以来2年になる。当時、国民民主連盟（NLD）は2020年11月総選挙で圧勝し、民主的に政権を確立した。この政権をクーデターで倒した国軍に対して、ミャンマー国民をはじめ全世界の平和と民主主義を求める人々が断固として闘いを続けている。そんな中、問題は日本政府である。一貫して軍政を支持しているのである。日本政府はアウンサンスーチーさんと国軍の双方に「独自パイプ」があると称して、国軍の暴挙を黙認しているのである。ネットメディア「日刊ベリタ」主宰の永井浩さん（元毎日新聞外信部記者）は、クーデター発生直後から、「日刊ベリタ」で事態を詳報し、闘うミャンマー国民を支援し、世界の人々にその闘いへの連帯を呼びかけてきた。「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会・事務局」は、この永井さんの姿勢と報道に注目して「事務局たより」号外で、闘いを紹介し、連帯を訴えてきた、

2023年になった、再び永井さんが「日刊ベリタ」で、「ミャンマー『夜明け』への闘い」という連載を開始した。「できるだけ多くの人に読んでもらいたいレポートなので、みなさんのネットワークで拡散していただければうれしい」と言っている。「ミャンマー民主化運動伴走記 2023年版」として紹介する。

◆2023年01月08日 <http://www.nikkanberita.com/read.cgi?id=202301081039510>

## ミャンマー「夜明け」への闘い（1）

### 「2023年、われわれの勝利をここミャンマーで祝おう！」 西方 浩実

ミャンマーの軍事クーデターからまもなく2年。民主主義の回復をめざして非暴力の「不服従運動」に立ち上がった広範な市民の闘いは、軍の残忍な弾圧によって封じ込められたかに見える。だが人びとは希望を失っていない。多くの若者が「夜明け」を信じて、今も国軍との武装闘争に身を投じている。2022年の大晦日の夜、日本で紅白歌合戦を見ていた私に、ミャンマーの友人からメッセージが届いた。「2023年、われわれの勝利をここミャンマーで、ともに祝おう！」。

クーデター後の日々が、一瞬にして蘇る。当時、国際協力団体の職員としてヤンゴンに駐在していた私は、軍事独裁の理不尽さに打ちひしがれながらも、決して諦めることを知らないミャンマーの人々の前向きさに、いつも励まされていたのだ。

#### 2021年2月1日、ミャンマー軍事クーデター

3カ月前の総選挙で選ばれたアウンサンスーチー氏



の率いる民主的な政府が突然ひっくり返され、国軍がすべての国家権力を握った。ミャンマーに仕事で駐在していた私が最初に心配したことは、怒った市民が暴動を起こすのではないか、ということだった。しかし、それは完全なる杞憂だった。

#### 「僕たちは絶対に暴力を使わない」

ミャンマー人の友達から初めてそう聞いたのは、軍事クーデターの翌日。「軍なんてぶっ殺してやりたい。」

でも少しでも暴力的に抵抗すれば、軍は治安維持を口実に、市民を徹底的に武力弾圧するだろう。今まで僕たちは、そうやって何度も弾圧され、殺され、負けてきたんだ」。非暴力闘争、それはつい数年前まで、半世紀以上にわたる軍事独裁政権下を生き抜いてきた人々の、誇り高き戦略だった。

彼の言葉通り、ミャンマーの人々は当初、すさまじい意志で非暴力を貫いた。民主化を訴えるデモ隊に軍が容赦なく放水し、銃口を向けても、彼らは街中を逃げ回りながら、叫び、歌い、平和的に抗議の声を上げ続けたのだ。同時に、国中の公務員たちは一斉にストライキを起こした。選挙で選ばれた政権のもとでしか働かない、という意志のもと、公共サービスを機能停止に陥らせることで軍への不服従を示したのだ。不当な権力に対し、人々が一丸となって非暴力・不服従を貫く光景は、感動的でした。

しかし軍は、そんな丸腰の市民を凄惨に虐殺し始める。人々は軍の蛮行を命がけで撮影し、SNS（ネット交流サービス）を通じて海外に発信した。ミャンマーを助けて！という、祈りにも似た必死の叫び。しかし、助けは来なかった。積み上がる死者数。武装しなければ、むざむざと殺されるだけだった。絶望した人々は、速やかに武力での反撃に舵を切った。学校や仕事を辞めた若者たちは、自発的に民主派の武装グループを結成し、軍事訓練を受け、今も軍とのゲリラ戦を続けている。

クーデターから1年が経過し、ロシアがウクライナに侵攻した2022年2月以降には、現地でこんな声をたくさん聞いた。「国際社会はウクライナのことは支援するけれど、ミャンマーを助けてはくれない。自分たちで何とかするしかないんだ」。

私はクーデター直後から、抵抗を続けるミャンマーの人々の姿をFacebookに投稿し続けてきた。軍が毎日、深夜1時にインターネットを遮断するようになると、とにかく1時に間に合うように書き上げて投稿した。目をつぶりたいくなるような現実を、時に泣

き出したくなるのをこらえて書き続けたのは、ミャンマーで何が起きているのか、一人でも多くの人に知ってもらいたかったからだ。自由な民主主義国で生まれ育った日本人の目に映る軍事クーデターとは、どのようなものだったのか。そして、ミャンマーの人々が、どれほど切実な願いを胸に闘い続けているのか。

混乱の中で日々書き続けたFacebookの投稿は、次第にミャンマーに心を寄せる人々の手によって拡散されるようになり、毎回何千人もの人に読まれるようになった。また、日本の友人と作成したミャンマー解説のイラストは、TwitterやFacebookで何万人にも拡散され、メディアに掲載されたり、学校の授業で使われたりした。

そうした私の個人的な活動が軍から目をつけられることを懸念した私の勤務先は、私に一切の発信を禁じた。軍に目をつけられたら、職員や組織が嫌がらせを受けたり、ミャンマーでの活動を続けられなくなったりするリスクがあるからだ。軍のやり方を考えれば、その懸念はもっともだった。私はFacebook上に匿名のページを開設し、書き続けた。言葉は、この理不尽な状況における私の唯一の武器であり、書き続けることは、無力な私のひそやかな抵抗運動だったのだ。

以下の報告は、私がFacebookに投稿し続けたクーデター後の日々を、加筆修正してまとめたものだ。実際の光景や感情をできる限りリアルに追体験してもらえよう、人権や自由を奪われるという自身の体験や、現地で生きる友人たちの生の声をそのまま残した。ニュースで語られる「軍事クーデター」や「民主化運動」といった硬質な言葉の奥で、ミャンマーの人々がどれほど切実に闘い続けているか、その思いが少しでも伝わり、私たち一人ひとりがミャンマーの現実とどう向き合っていくかを考えるきっかけになれば嬉しい。

◆2023年01月09日

## ミャンマー「夜明け」への闘い（2）

### 「スーチーさんが捕まった」の衝撃

西方 浩実

2月1日、月曜日、午前6時50分。ミャンマーの最大都市、ヤンゴン。珍しくアラームより早く目が覚めた。今何時だろう、と薄暗い室内で寝転んだままスマホを手に取ると、近所に住む友人から、不在着信とメッセージが届いていた。「スーチーさんが捕まった」。

えっ！と思わず声が出た。ガバッと起き上がり、絶句したままメッセージを読み返す。

急いで友人に電話をかけ直したが、すでに電話は通じなくなっている。微弱につながっていたインターネットで検索すると、すでに日本語のニュースサイトに「ミャンマーで軍事クーデター発生」との速報が流れていた。そのインターネットも、しばらくすると完全に遮断された。いったい何がどうなっているのか、まるでわからない。

現実を受け入れられないまま呟く。

「まさか、本当に起きるなんて・・・」

実は、ミャンマー国軍がクーデターを起こすかもしれない、という噂があった。2020年11月の総選挙で大敗を喫した軍（注1）が、1月下旬に、クーデターの可能性を示唆するような発言（注2）をしていたからだ。数日前には知り合いの日本人からも、国連で働く職員からの非公式情報として「48時間以内にクーデターが起こる可能性がある」という注意喚起のメールが回ってきていた。

だが、それでも「まさか」と思ったのは、その時点で日本大使館や国連機関の事務所などに確認したところ、誰もが口を揃えて杞憂だと言い切ったからだった。日本大使館の職員からは「そういう噂があることは承知しているが、根拠はない」と説明を受け、ある国連機関の事務局長（ミャンマー人）は

電話口で「ただの噂だよ。ミャンマーではよくあることだ」と断言した。双方とも、むしろ不確かな情報に振り回されてパニックに陥らないように、と心配してくれた。臨時の治安情報を配信する日本大使館からのメーリングリストも配信されなかったし、ヤンゴンの街も人々もいつもと変わらず平穏そのもので、私は「やっぱりただの噂なんだ」と思い、そしてそう思ったことすら忘れた。

しかし、その平穏は偽りだったのだ。2021年2月1日、本来なら11月の総選挙後はじめて議会が開かれるはずだった日。ミャンマー国軍は、アウンサンスーチー国家顧問（注3）やウィンミン大統領はじめ、与党である国民民主連盟（National League for Democracy：NLD）の重要人物など約40人を一気に拘束し、「国家非常事態」（注4）を宣言した。この宣言により、すべての国家権力が国軍総司令官ミンアウンフラインの手中に落ちた。かくして、半世紀もの軍事独裁体制からようやく2015年に民主主義政権を樹立したばかりのミャンマーは、一夜にして再び軍の支配下に戻ってしまったのだ。

その日の夜、どこかのメディアが作成したという拘束者リストの画像が友人からまわってきた。そこには、首都ネピトーにいる政治家だけでなく、地方の州知事、著名な作家や映画監督、民主活動家たちの名前もあった。さらにその日のうちに、省庁の大臣もぞろりと軍側の人間に交代した。ここまで手広く、一気に、そして静かにすべてが成し遂げられたことには、ぞっとするような不気味さがあった。選挙に大敗した軍が破れかぶれになったわけではなく、周到に計画されたものだという感じがした。

ただ、問題は「いったい何のために」ということだ。軍が政権を奪ったということは、今後ミャンマーを

続べていくシナリオがあるということなのだろう。しかしそのシナリオがまったく読めない。2012年の民政移管以降、ミャンマーは民主化の恩恵を受けて順調に発展し、欧米からの経済制裁も解かれ、人々の生活は豊かになった。明るい希望に向かって伸びゆく国を今さら軍事政権に戻すことに、国民は全力で抵抗するに違いない。同時に国際社会からは厳しく批判され、再び制裁を受けるだろう。それを承知で、ただ権力欲のままにクーデターを起こすなどということがあるだろうか。何か勝算があるのではないか。あるとしたら、それは何なのか……。

### ▽心優しい人びとの国でなぜ？

私がミャンマーに渡航したのは2018年。とある国際協力団体の現地駐在員として、最大都市ヤンゴンに赴任した。以前にも途上国で働いた経験はあったが、ミャンマーに赴任が決まった時は、格別に嬉しかった。というのは、かつて私は一度ミャンマーを旅したことがあり、その思い出が最高に温かかったからだ。

軍事独裁国家で不自由な生活を強いられているはずの人々が、驚くほどにこやかで優しくかったこと。派手にお腹を壊した私に、ゲストハウスのスタッフが心配そうな顔で、薬やご飯を届けてくれたこと。仲良くなった村の少年たちが、ギターを奏でて歌ってくれた、長渕剛の『乾杯』(ミャンマー語バージョン)。金色の仏像の前に跪き、額を床につけて祈る人々の姿。停電した町にポツポツと灯る、オレンジ色のろうそく。優しくて温かい熱帯の国、ミャンマー。いつかこんな国で暮らせたら、とボンヤリ憧れていた。

2018年、12年ぶりヤンゴンを訪れると、表面的に見える景色はすっかり様変わりしていた。2011年に民政移管してからというもの、街にはタイやベトナム資本の大型ショッピングセンターが建ち、朝夕のすさまじい交通渋滞の車内では、人々がスマホをいじるようになっていた。以前の土埃と人いきれを思い出してどこか寂しく感じたが、独裁政権が終わって外資が流入し、経済的に豊かになったことは、彼ら

にとって喜ばしいことに違いなかった。

嬉しかったのは、ミャンマー人の優しさと穏やかさが健在だったことだ。タクシーや地元の市場では、外国人だからといってぼったくられることもなく、むしろ皆うれしそうに微笑みかけてくる。さらに明るい変化として、人々は自由を謳歌するようになっていた。若者たちは海外旅行や国外留学ができるようになり、路上の本屋には、軍政下で禁じられていたアウンサンスーチー氏の著書が並んでいた。軍事政権時代の教育カリキュラムも見直され、教科書を暗唱させる教育から、考える力をつける内容へと変化しつつあった。

今後もミャンマーはこうして豊かになっていくのだろう。漠然とそう思っていた私にとって、軍事クーデターの一報は大きな衝撃だった。順調に発展してきた民主主義国家が、今日から再び軍事独裁国家になる。それが一体何を引き起こすのか、民主主義の国で生まれ育った私には、とても想像できなかった。

最初に考えたのは、怒った市民が暴動を起こすのではないか、という懸念だった。そうなれば、私のような援助団体も、活動を中断せざるを得なくなる。それは、支援を必要としている人たちを見捨てることにつながる。さらに国としての信用が落ちれば、外国からの経済制裁が再開され、外資系企業も去り、ミャンマーは貧困状態に陥るだろう。そのしわ寄せが最初にいくのは、予備力のない貧困層の人々だ。しかし彼らに手を差し伸べるべき援助機関は、その頃にはもう国内にいないかもしれない……。

軍事クーデターは、今後この国の発展にまちがいはなく負の影響を及ぼすだろう。一体、なんてことをしてくれたんだ……。混乱と戸惑いの中で、私はただただ腹を立て、ぶつけようのないやるせなさで悶々としていた。

<注>

1 改選議席のうち、約83%にあたる396議席をア

ウンサンスーチー氏率いる国民民主連盟（National League of Democracy）が獲得。一方、国軍出身者が率いる最大野党、連邦団結発展党（Union Solidarity and Development Party）の獲得議席数は 33 議席にとどまった。

2 軍は 11 月の総選挙に不正があったとして、選挙の調査・やり直しを訴えていた。2021 年 1 月 26 日の記者会見で、記者から「軍はクーデターを起こさないと言えるか」と質問された軍報道官は「起こすとも起こさないとも言わない」と発言していた。なお、この総選挙には日本政府からも選挙監視団が派遣されており、団長の笹川陽平氏は選挙後、「選挙は非常に公正に行われ、国軍も結果を受け入れている」と発言している。

3 ミャンマー独立の父、アウンサン将軍の娘であり、非暴力民主化運動の指導者。与党、国民民主連盟（NLD）の党首。1988 年の民主化運動の際に活躍

したが、その後軍により約 20 年にわたって断続的に自宅軟禁下に置かれた。多くの国民が「アマー・スー」（スーお母さん）と慕い絶大な信頼を寄せる、ミャンマーのカリスマ的リーダー。

4 軍は「11 月の総選挙で、有権者名簿に不正があったが、NLD 政権は調査にもやり直しにも応じなかった」と政権を批判。総選挙の不正は民主主義の危機であるとして「国家非常事態宣言」を発令した。これにより司法・立法・行政の全権限が国軍総司令官に委譲された。この宣言はかつて軍政下で制定された、軍の強い政治的権限を認める現行憲法（通称 2008 年憲法）で規定されており、別名「クーデター条項」と呼ばれていた。なお、この時ウィンミン大統領はすでに軍によって拘束されていたため、軍出身のミンス工副大統領が代理で国家非常事態を宣言した。

◆2023 年 01 月 11 日

ミャンマー「夜明け」への闘い（3）

## 非暴力「不服従」の抵抗運動開始

西方 浩実

クーデターの一報に衝撃を受けた頭で、次に考えたことは、どうしようもなく個人的かつ重大な問題だった。トイレトペーパーである。クーデターの噂が出た時に、念のため水や食料は数日分確保したのだが、うっかりトイレトペーパーを買い忘れていたのだ。そこで半分はトイレトペーパーのために、半分は怖いもの見たさに、恐る恐る地元の市場にでかけることにした。クーデター直後、2 月 1 日朝 7 時頃だ。

### ▽平穏な日常光景の裏に渦巻く憤怒

通りに出て驚いた。普段とまったく変わらなかったのである。路線バスにはいつも通り、出勤するミャンマー人がぎゅうぎゅうに乗っているし、顔なじみのタクシー運転手が「ハロー、ジャパニーズ、どこに行くんだい？」と話しかけてくるのも同じだ。

毎朝地元の人で賑わう市場は、いつも通り新鮮な野菜や果物が、ふだんと変わらぬ値段で売られている。この人たちは、まだニュースを知らないのだろうか。いや、口コミ社会のミャンマーで、この急転直下の一大事を知らないなんてあり得ない。母と敬愛するアウンサンスーチー氏が拘束され、悪名高い国軍が再び人々を支配する・・・それは一夜にして光が闇に変わるような衝撃であったはずだ。

しかし、夕方にも懲りずに街に出てみたのだが、やはり人々は普段通り、平穏に生活をしているように見えた。市場やスーパーは時間を短縮していたが、十分に品揃えがあり、屋台も営業している。試しに ATM にカードを入れてみると、すんなりと現金をおろすことができた。あれ、「クーデター」って何だった？もっと社会に混乱を引き起こすものじゃなかったっけ？私は首をかしげながら帰路についたのだっ

た。

私が感じた平穏が、かりそめの光景であったことを知ったのは、一夜明けた2月2日のこと。遮断されていたインターネットが繋がるようになり、同僚たちと朝のオンラインミーティングを開いたときだった。画面上に映ったミャンマー人の同僚の顔を見て、私は思わず息を飲んだ。いつも朗らかで笑顔を絶やさないスタッフの顔つきが、能面のように無表情だったのだ。

「昨夜は一睡もできなかった。ご飯も一口も食べられなかった」と彼女は言った。そしてクーデターについて何か言おうとするのだが、言葉が感情に追いつかず、涙をこらえて黙ってしまう。「今日はとても仕事にならない」と絞り出すように言った彼女に、そうだね、と頷くことしかできなかった。

他の同僚や友人たちにも連絡をとった。電話の向こうで、友人は嘆き、悔しがり、そして怒っていた。「僕らは絶対に軍政を認めない！絶対に、だ！僕らが選挙で選んだ政府は、NLD なんだ。選挙に不正なんてない。ただの言いがかりだよ。・・・ミンアウンフライン（国軍総司令官）なんて、ぶっ殺してやりたい」。

彼の言葉に、市民の暴動を連想した私は、おそろおそろ彼に尋ねた。「今のところ、街はとても落ち着いているように見えるんだけど・・・これから何か起きるのかな？」

彼はこう答えた。「僕たちには、抗議活動はできない。僕らがデモをして、万が一それが暴徒化すれば、軍は“治安維持”という名目で武力弾圧してくるだろう。奴らはそのために、僕らを挑発して、暴動を起こさせるんだ。僕たちの人生はミャンマーが民主化する10年前までずっと、軍事政権下にあった。奴らのやり方は、嫌というほど知っている。だから、どんなにはらわたが煮え繰り返っても、それを実際の行動で示すことはできないんだよ」

「ぶっ殺してやりたい」ほど怒っていても、抗議をすれば弾圧の理由を与えてしまうから動けない・・・では、耐えるほかないのだろうか。「それじゃ、どうするの？」おずおずと聞くと、彼は予想外の答えを口にした。「インターネットで闘う」。そして「Facebook を見てみなよ」と言った。

### ▽「ミャンマーを救え！」先頭に立つ公務員

ミャンマーでは「インターネット=Facebook」と言っても過言ではなく、スマホユーザーのほぼ全員がFacebook を使っている。何か調べたいときも、Google ではなくまず Facebook の検索バーで検索するほどで、もはや情報のプラットフォームと言っても過言ではない。

電話の後、さっそく Facebook を覗いてみると、彼の言った通り、そこではすでにミャンマー市民の抵抗運動が始まっていた。

#Save\_Myanmar

#Reject\_Military\_Coup

Facebook には、そんなタグがついた投稿が次々に投稿されていた。そこには「絶対に軍を認めるな」「暴力を使わずに戦おう」など決意表明のような切実な言葉が綴られ、その数が分刻みで積み上がっていく。そうした投稿の中で、ある一つのタグが目にとまった。

#Civil\_Disobedience\_Movement

市民的不服従、略して「CDM」。

このタグとともに投稿されていたのは、白衣を着た医療者や、緑色のロンジー（ミャンマーの伝統衣装である巻きスカート）を履いた教師たちの写真。軍政への不服従を示す3本指を立てている人たちもいる。そして「私たちは公平な選挙で選ばれた政権の下でしか働かない」という決意の言葉。彼らは公立の病院や学校で働く公務員、つまり政府の職員だった。彼らは、選挙で勝った民主政権を乗っ取った軍を政府とは認めず、逆に職務を放棄することで、軍による国家運営を止めようとしていたのだ。

公務員が仕事をやめれば、この国の公共サービスは止まる。病院、学校、銀行、鉄道・・・すべてが機能不全に陥る。そうなればもちろん、市民たちは困る。だが軍にとっても、国家運営ができなければその支配は立ちゆかない。それこそが市民たちの狙いだった。人々は自分たちの犠牲を承知で、軍政にプレッシャーをかけ、軍側の譲歩を引き出そうとしていたのだ。

驚いたことに、彼らは Facebook 上に、顔だけでなく氏名や所属先まで公開していた。職場である公立病院の前で、3本指を掲げて集合写真を撮っている人たちもいる。つい数年前までの軍政下では、政権批判など許されず、軍政に逆らおうものならすぐに治安部隊がやってきて、拘束されるのがオチだった。その時代をよく知る人々が、今こうして反軍政の姿勢を明らかにして、正々堂々と立ち上がっているのだ。なんとという勇気だろう。スクリーン越しに思わず「すごい…」と呟く。鳥肌が立っていた。

CDM に参加表明した公務員たちの投稿に対しては、無数の Facebook ユーザーが「いいね」ボタンを押し、「ありがとう」「あなた方を誇りに思います」などの称賛のコメントが秒単位で更新されていった。さらに「公務員たちはみんな CDM に参加して」と公務員らの決意を後押しするコメントも次々と投稿された。

個人的に衝撃的だったのは、この CDM が「医療者」から始まったことだった。ミャンマーでは日本と違い、ほとんどの病院が公立病院である。そのため、公立病院の医療者がストライキを起こすと、ミャンマーの大多数の人々が医療へのアクセスを失うことになる。人命を救う医療者たちは、本来、最後まで仕事を続けるべきではないのだろうか？

この疑問には、数ヶ月後に知人の医師（30代）が答えてくれた。「クーデター直後、すぐに医療 CDM が始まったのは、専門職である医療者には代わりがないからだよ。僕たちが働くのをやめると、国中で非

常に重大な問題が起きる。だから、すぐに事態を変えられると思ったんだ」

この意図を、患者たちもよく理解していた。入院患者のケアのため病院に残った数少ない医療者たちが CDM に参加できるよう、多くの患者たちが自主退院してこれを支えたのだ。（なお、急患や重症患者のために病院に残らざるを得なかった医療者の多くは、反軍政を示す赤いリボンを胸元につけて働いていた。）

CDM で病院を去った医療者たちも、今度は逆に、そうした患者たちを支えるべく、Facebook にこんな投稿を上げ始めた。「〇〇地区で体調が悪い人は、私が診察しに行きます。電話番号は・・・」。病院はもはや機能しない。けれど医療者たちは決して患者を見捨てたわけではなかったのだ。

民間紙イラワジには、クーデター翌日、CDM に参加した医師のこんなコメントが掲載された。「私たちが医療を通して救えるのは一部の患者の命だけ。しかしクーデターに対して沈黙を貫けば、軍政下で毎日何百人もの希望が失われるだろう」

これに対し、軍の関係者は個人の Facebook アカウトで「軍にだって医者はいる。君たちがいなくても十分やっていける」などとうそぶいたという。この投稿を見た同僚は「そういう奴らなんだ」と、吐き捨てるように言った。

◆2023年01月13日

ミャンマー「夜明け」への闘い（4）

## 「軍は権力と利益がほしいだけ」

西方 浩実

2月2日、夜8時。憑かれたようにインターネットでクーデター関連のニュースを追いかけていた私の耳に、突然ガンガン…という大きな音が響いてきた。トタン屋根に石でもバラまかれているかのような騒音だ。

るせなさで胸がいっぱいになる。

この鍋叩きへの呼びかけも、やはり Facebook を通して行われていた。インターネットで闘う、といったスタッフの言葉の意味を、私は少しずつわかり始めていた。

### ▽「悪霊を追い払え！」鍋叩きの大音響

### ▽嵐の前の静けさ

いったい何が起きたのか、と驚いて窓際にかげより周囲を見回すと、近隣アパートの住民らがベランダなどで一斉に何かをガチャガチャと叩いているのが見えた。軍への抗議だ、とすぐにわかった。軍が発令した、夜8時からの夜間外出禁止令。その開始時間に合わせて、みんな家の中で金属のものを叩き、抵抗の意志を示しているのだ。

2月5日、朝起きると、友人から「Facebook へのアクセスが遮断された」というメッセージ。一気に目がさめる。確かにインターネットにはつながるが、Facebook は開けなくなっている。ミャンマーの人々の大切なものが、また一方的に奪われた。軍にとって都合が悪いものは、軍の思惑1つで排除され、人々は自由や権利をむしりとられていく。でも、それに立ち向かうすべがない。それがこんなにも悔しいことだったなんて・・・。

道路を見下ろすと、誰もいなくなった暗い路地を、アルミ皿を打ち鳴らしながら、ひとりの女性が足早に歩いてゆく。外出禁止令を破り、ピンと背筋を伸ばし、胸を張って。危険を承知で周囲の住民たちを鼓舞して回る、名もなき抵抗者の誇り高い姿に、胸を打たれた。私もたまたま台所にあったフライパンとしゃもじを掴み、一緒に打ち鳴らす。負けるな。負けるな。

ミャンマー人たちは Facebook がダメならば、と、どんどん Twitter アカウントを開設し始める。すると案の定、さきほど Twitter も使えなくなった。どこまでやる気だ、このやろう・・・。このままだと LINE や Google など、他のコミュニケーションツールが使えなくなるのも時間の問題かもしれない、と焦る。

あとからわかったことだが、ミャンマーでは伝統的に、金属を打ち鳴らして村や家から悪霊を追い払うという風習があるという。つまりこの大音響は、悪霊に見立てた軍に対する「出て行け！」という叫びだったのだ。

それでも VPN（注1）というサービスを使えば SNS にアクセスできるらしい、という情報がどこからともなくもたらされ、私も急いで VPN をダウンロードする。安くて使いやすい VPN アプリの情報が飛び交う。軍からは「VPN も使えなくする」という内容のアナウンスが出たらしいけど、知るか。できるものならやってみろ！という気分だ。（ちなみに数日後、いくつかの大手 VPN のダウンロードサイトにはアクセスできなくなっていた。）

メッセージボードも、シュプレヒコールもない。だが、ヤンゴン中の家という家から空に立ち上る金属音は、どれほど多くの人々が反軍政の炎を心の中に宿しているかを明確に示していた。「どんなにはらわたが煮え繰り返っても、実際の行動で示すことはできない」。同僚の言葉が胸によみがえり、悔しさとや

ヤンゴンの自宅周辺は、相変わらずのんびり平穏だ。

市場で果物を買くと、店の女の子は「コレ、とっても甘いだよ」と微笑んで、みかんを1つオマケにくれる。アパートの陽気なセキュリティは「お、ジャパニーズ、お出かけかい？」といつもの調子で話しかけてくる。同じ街でCDMや鍋叩きが起きていることが嘘みたい。

地元の人々と笑顔で言葉をかわしながら、この人たちはなぜ笑えるんだろう、と思う。突然軍に支配されて、悔しくないのかな……。そしてそう思った直後、「あ、もしかしてこの人、軍側の支持者？」と思いつき、そういう二項対立の思考に陥っている自分に気づいてゾットとする。争いは、分断を招く。そのことを思い知らされる。

それでも、少しずつ市民の中に動きが出ているという情報も入ってきた。例えば、クーデターから2日後、ヤンゴンのレーダン地区に住む知人から「市場で国歌の歌詞を書いた紙を配っている人がいた」と連絡がきた。夜、鍋を叩くときにみんなで歌おうという呼びかけらしい。その人は「俺は捕まるかもしれないけど、みんなで歌ってくれ」と話していたという。

またクーデターから3日後、2月4日にはマンダレー（ミャンマー第2の都市）で、クーデター後初めての抗議活動。メガホンや横断幕を持って立ち上がった青年たちのうち数人は、ものの数十分で軍に連行された。ヤンゴンの小さな街角でも、一部の若者が抗議のプラカードを掲げて声を上げる様子がFacebookで伝えられた。

一方、私の自宅周辺はクーデター後もほとんど変わらず穏やかだった。だが、ひとつだけ変化があった。それは、家々の窓やベランダから、真っ赤なNLD（国民民主連盟）の党旗がそっと消えたこと。昨年11月の総選挙でNLDを支持していた大勢の人々が、自宅に掲げたままにしていたものだが、軍に政権を奪われた今、こうした意思表示は軍の標的にされかねない。

脳裏に蘇るのは、つい3カ月ほど前、選挙でNLDが改選議席の9割を獲得して圧勝し、大喜びしていた友人たちの姿。近年のミャンマーの発展について語るたびに、いつも「Because of Daw Aung San Suu Kyi（スーチーさんのおかげ）」と胸を張る同僚の、誇らしげな顔が脳裏に浮かぶ。彼女たちも、NLDの旗を下ろしただろうか。旗を下ろす時、いったいどれほど悲しく、悔しかったことだろう。胸がキューツと切なくなった。

その同僚からは今日、こんなメールが届いた。

We all can't eat and sleep well during these days.  
I can not concentrate on work and everything.  
（私たちは皆、ここ数日、ご飯も食べられないし、眠れない。  
仕事にも、他の何にも集中できない。）

But we must try to find a way to escape this injustice.  
So, we all are using "civil disobedience" to be against the military coup.  
We will never reduce our hope to reach back to normal.  
（でも、この不当な状況から逃れる方法を見つけなきゃいけない。

だから今、私たちは「不服従」で軍と闘っている。  
私たちは、あるべき状態に戻るまで、少しも希望を捨てない。）

軍はいったいなぜクーデターを起こしたのか。1週間が経っても、私は納得のいく答えを見つけれずにいた。ミャンマー人の友人たちは、口々に「軍は、いつも自分たちがいちばん偉大な存在でありたいんだ」「自分の利益を守ることしか考えない自分勝手なやつらだよ」と吐き捨てる。しかし、権力や利益がほしいだけで、圧倒的支持を誇るアウンサンスーチー氏を拘束して、国民を敵に回すなんてこと、ありえるだろうか……。

何か他に意図があるのでは、と勘ぐる私に、ミャンマー人の友人は呆れたような、同情するような顔を向けた。「それ以上の意図なんてないよ。軍がどれほど傲慢で自分勝手か、君は知らないんだ」。そして最後に、先と同僚と同じことを言った。「だけど今度は、思い通りにはさせない。僕らは絶対に諦めないよ」。

◆ 2023年01月15日

### ミャンマー「夜明け」への闘い（5）

## あちこちに3本指、クラクションの大洪水

西方 浩実

2月6日、クーデターが起きてから最初の週末。間違いなく何か起きる、と誰もが予感していた。同僚は当初「デモはできない」と言っていたが、人々の怒りと絶望の大きさを考えれば、夜に鍋を叩くだけで終わるはずはなかった。抗議運動が始まるのだろうか、暴動になって武力弾圧されてしまわないだろうか……。

土曜日、午前10時頃。朝からソワソワと緊張していた私に、あちこちのコミュニティから情報が入り始めた。「郊外でデモが始まった」「ヤンゴン北部に集まった人々が、集団で南下している」「警察が護送車を走らせている」……。いよいよ始まったか。どうか、どうか血が流れませんように……！

祈るような気持ちで、さらなる情報を検索しようとしていたとき、突如インターネットがまったくつながらなくなった。またか！おそらく軍が、市民のあいだでデモの情報が拡散され、運動が拡大するのを阻止しようとしているのだろう。こうなると、自宅にテレビやラジオがない私は、まったく情報にアクセスできなくなる。（テレビはどうせ、軍が乗っ取った国営チャンネルしかやっていないけれど。）

ご近所さんに電話をかけてインターネット状況を聞くと、彼の家でWi-Fiプロバイダはまだ繋がっているという。さっそくお宅にお邪魔して、日本にいる

<注>

1 Virtual Private Network の略。各ユーザーの仮想ネットワークを構築し、通信内容を暗号化してデータをやりとりする……と、言葉にすると難しい仕組みだが、とにかくミャンマー国内からのFacebookへのアクセスを、他国からのアクセスに見せかけて、ミャンマー国内での接続禁止をすり抜けることができる。

家族や友人が心配しないよう、急いで連絡……している途中で、このWi-Fiも切れた。ちきしょう。ヤンゴンで使える数種類のインターネットプロバイダが、次々に遮断されていく。そうしてお昼が過ぎた頃には、インターネットに接続できる人は誰1人いなくなった。（ちなみに、この日の夜には電話もつながらなくなり、連絡手段は完全に断たれた。）

軍の思惑ひとつで、軍の都合のいいように、自由が奪われる。2015年まで50年あまり続いた軍事独裁政権のもとで、ミャンマー人たちはこうやって一方的に、いろんな権利を奪われてきたんだ……。体験して初めてわかる不条理に、唇を噛み締める。

情報も着信もなくなった午後。相変わらず自宅周辺の様子は落ち着いているので、偵察がてら散歩に出かけることにした。穏やかな昼下がりの日差しと、広がる青空の下、のんびり歩く。「軍事クーデター」や「抵抗運動」などという物々しいキーワードと、どかな光景とのギャップに、いったい何が真実なのかわからなくなる。

ふと道路の向こう側に目をやると、プラスチック椅子に座って井戸端会議をしている数人のおばちゃんたちが、不自然に片手をあげていた。何だろう、と思って目をこらすと、指を3本揃えて立てている。あっ！と思う。Facebookで見た、軍政への抵抗を表

すジェスチャーだ。静かなプロテスト。道路のこちら側から3本指を立てて応えると、それに気づいたおばちゃんたちが、パツと嬉しそうな顔をする。

大通りに近づくにつれ聞こえてきたのは、無数のクラクションの音。道ゆく車が、プーツ、プーツと、クラクションを長く響かせながら走っている。ヤンゴン南北に貫くカバエパヤー通りは、音の大洪水。どの車の窓からも、3本指を立てた腕が突き出されている。歩行者も、バスを待つ人も、自転車に乗った人も、みな3本指を高く掲げて応じる。私も3本指を立てながら歩道を歩く。無力な自分のせめてもの意思表示。同じく3本指を立てた人たちと、微笑みをかわす。あきらめないぞ、と思う。

2月最初の週末、抗議運動はそんな風に、すこんと晴れ渡った青空の下、清々しいほど平和に始まったのだった。

### ▽全土に広がる抗議デモと赤い旗

翌日曜の2月7日になると、市民の抗議運動はさらに勢いを増した。朝から、絶え間ないクラクションや拍手が聞こえてくる。インターネットも電話も昨日から遮断されたままだが、人々は大通りや広場に集い、声を上げ始めたようだった。

昨日、まだ電話が通じる時間帯に話したミャンマー人の友人によると、今日からヤンゴン中の全ての公立病院がCDM(公務員のストライキ)に入るらしい。またかつての民主化運動のリーダーで、辛くも軍の拘束を逃れたミンコーナイン氏(注1)が、街のどこかに姿を見せるという噂もある。抗議運動は、想像した以上に一気に本格化しそうな気配だった。

\*\*\*\*\*

### 元外信部編集委員・永井浩さん

## 『ミャンマー「春の革命」一問われる[平和国家]日本』刊行

ミャンマー(ビルマ)には、厳密にいうと日本のような四季はなく、春と呼べる季節はないようだ。しかし京都大学で客員研究員として過ごした経験が

周囲の様子をしてみようと外に出てみると、自宅周辺の通りには、昨日より「赤」が増えていた。赤は、スーチーさん率いるNLD(国民民主連盟)党の色だ。赤い旗をつけたタクシー。赤い風船をつけた屋台。赤いロンジー(伝統衣装)を着た子どもたち。赤いTシャツばかりが干してある家。

大通りに出ると、クラクションはさらに増え、スーチーさんの顔写真やNLDの党旗も見える。赤いハチマキをした若者たちが、道ゆく車に大きな赤い旗を振っている。何も知らずにこの光景を見れば、楽しいお祭でもやっているのかと思うだろう。でもこの赤は、自由と民主主義への切なる祈りの色なのだ。

夕方、ようやくインターネットが使えるようになった。Facebookにアップされたミャンマー各地の映像や写真を見て、私は感動で鳥肌が立つような思いがした。人々が声を上げていたのは、ヤンゴンだけではなかった。ミャンマー全土の街という街、村という村で。山岳地帯や、乾燥地域や、海岸沿いで。何十万人、何百万人もの人が立ち上がっていた。

約50年もの間、耐えに耐えて、ようやくつかんだ民主主義。たった5年で終わらせてたまるか。そんな叫びが聞こえる気がする。

<注>

アウンサンスーチー氏とともに1980年代の民主化運動を率いた活動家。1988年当時はヤンゴン大学の3年生で、全ビルマ学生連盟の議長として活躍。1989年から2012年までに3回投獄され、断続的に約20年の獄中生活を送った。

あるアウンサンスーチーさんは、植物が芽生え萌え出る季節のイメージは日本と同じだという。2021年2月に国軍によるクーデターが起き、民主主義の回

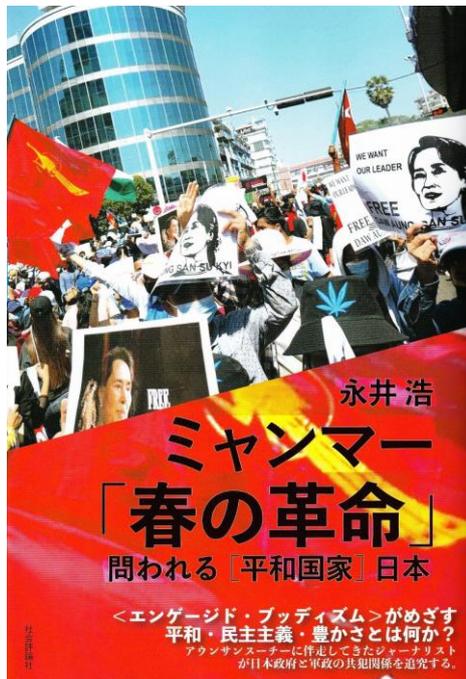
復を求めて抗議の行動に立ち上がった人々は、非暴力による不服従運動を「春の革命」と表現し、革命を目指す闘いはいまでも続く。

永井浩さんは毎日新聞にスーチーさんの『ビルマからの手紙』を連載した1996年以来、スーチーさんの活動取材してきた。新聞記者としての現役を退いた後も、インターネット上のニュースサイト「日刊ベリタ」を立ち上げ、日本の新聞やテレビでは目にすることの出来ない情報を発信している。

この著書でまず取り上げられているのは、国軍のクーデターに対する日本の対応への異議申し立てである。日本は最大のODA（政府開発援助）をミャンマーに投じてきたが、クーデター後も新規のODAは見送ったものの、既存分はそのままの状態が続く。日本政府は国軍とスーチーさんの双方に「独自パイプ」があるといい、このルートを通じて対応すると表明してきたが、その裏に見えてくるのは国軍に肩入れする日本の姿だった。

国軍が昨年未までに1300人もの市民を虐殺してきた経過の中で明らかになってきた「独自のパイプ」の一つは「日本ミャンマー協会」（会長・渡邊秀央元郵政相）の存在である。協会は日本企業のミャンマー進出の窓口となり、主に国軍系企業との関係を密接に維持してきた。渡邊会長はクーデターの首謀者であるミンアウンフライン国軍総司令官と親しく、クーデター以前の2014年から日本財団（笹川陽平会長）とも協力して自衛隊と国軍将官級交流プログラムなどを進めてきた。

こうした関係から、日本政府が強調する「独自パイプ」は、不服従運動に立ち上がった市民より、国軍寄りの動きが際立つことになった、と指摘されて



いる。ミャンマー進出の日本企業約400社の経済的利益を優先し、米国ですら国軍政府に制裁措置をとっている中で、日本政府は動こうとはしていない。

「日本は、国軍による国家テロへの加担者」「私たちの平和と経済繁栄の一部に、ミャンマーの人々が流した血の匂いが潜んでいる」と永井さんは書いている。在日のミャンマー人たちが「日本のおカネで人殺しをさせないで!」と抗議の声を上げ

ている現実。ロシアに侵攻されたウクライナだけでなく、もっとミャンマーに目を向けるべきだ、と思わざるを得ない。平和と民主主義の闘いへの支援を求めるさまざまなメッセージを発信している隣人の声にどう向き合ったらいいか、と永井さんは問いかける。

自宅軟禁から刑務所内の施設に移され、自由を奪われているというスーチーさん。通算15年の自宅軟禁の時期も含め、一貫して民主化運動の先頭に立ってきた彼女を支える思想は何なのか。ここでは「エンゲージド・ブディズム（社会参画する仏教）」という言葉で、行動する彼女の思想、価値観が説き明かされている。仏教の「慈悲と誠実」。外交官だった母親とともにインドで暮らした体験から学んだガンディーの「非暴力不服従」の思想をはじめ、さまざまな仏教の実践者や研究者の事績も紹介されている。

スーチーさんは1945年6月19日生まれの喜寿。誕生日が同じである縁もあって、彼女の動静をいつも気にしてきた。彼女たちの闘いが勝利の日を迎える日を願ってやまない。（高尾義彦）

＝毎日新聞OB「毎友会」ホームページから